

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

この3月で、未曾有の大災害、東日本大震災事故から満2年をむかえることになる。

親身になって、災害復旧に努力されている方々に心から感謝を申し上げたい。

遅々として、進まない復旧現場を見聞きするにつけ、阪神、淡路大震災から今年で満18年という現実、月日の立つのが如何に早く、人間の記憶や脳裏から消え去ろうとするはかない現実に唖然とする気持ちを感じる。東日本大震災の被害は、阪神、淡路大震災にくらべ、津波と原子力発電所事故を複合する大事故であり、決して、忘れてはならない事故である。地震国日本ではさけて通れない事故だったのかと思考している。

次に予想される、東南海大地震も皆んなの英智をあつめて、事前に予想される事態に対して、十二分の対応、対策を講じるのが人間の英智だと思考する。

想定外では、すまされないと考え「一隻眼」という「心眼」を学び、対応・対策を熟慮し、「我以外皆法身也」で、自己以外はすべて法身=真理=師であるを学び、己れの力は1であり、あとの99%は囲りを取りまく人々の協力、教えによってなりたつことを謙虚に自覚し、「コミュニケーションを考える」で、如何に高度情報技術化社会とはいえ、人間には「心」が存在するという、いわゆる「思いやり」、「気くばり」、「心くばり」がないと誰れもついてゆかない現実を考え、真理に暗い事実から乖離した仏教でいう無明の世界へ入っては、何んの解決にはならないことを謙虚に学び知り常に改善、向上、進歩を考えたい。

人間、常に己れの努力、精進なくしては何も解決しないことを学び知る「心眼」を持ちたいものである。

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師

元近畿大学産業理工学部客員教授

日本禅画家協会名誉理事

中国少林書画院名誉教授

法号位 法印 禅画位 奥伝

青木伸雄

釋 禪 禪 (野風生)

雅号 樹泉

2. 「一隻眼」を学び実践する

仏教の教え、特に禅宗で用いられている頌古（一般に偈頌ともいわれ、仏徳を賛嘆する教理を述べたもの）がある。いわゆる仏道修業で得られた仏果である。

その代表的な仏教の教えのなかに碧巖録がある。これは、中国の宗（960～1279）の時代の禅僧圓悟克勤が雪竇重顕の1700ある教えのなかから選んだ百則の頌古に垂示（師僧の教え）、評唱（教えの根本的説法）、著語（公案等に対する教え）を加わえたものであり、北宋の1125年完成した。正式には「仏果圓悟禅師碧巖録」10巻のことをさす。また「仏果碧巖破関撃節」ともいわれる。

この碧巖録は、中国臨済宗で元代（1271～1368）になり重用されるようになり、我国にも伝えられた。

その教えのなかに登場する頌古、いわゆる偈頌のなかに「一隻眼」という、物の見方、考え方がある。

「一隻眼」とは、1個の眼のことで禅語では、真実を見抜く眼のことである。碧巖録の第8則に「一隻眼を具す」の教えがあり、肉眼以外の眼識、眼力を「心眼」という。いわゆる「心眼」とは、碧巖録の第3則の「頂門に眼を具す」、第26則の「頂門には眼あり」と説く、頭の最上部にある「頂門眼」に同じである。

いわゆる、物事の真実を見極める眼識であり、見識である。目で見える表面的な一般的な、物の見方、考え方をさける思量分別を求める教えである。

現在の我国では、個人個人の身勝手な物の見方、考

